

058

俳諧資料カード



年代

編者  
(筆者)

書名

備考

③  
②

(下垣内蔵)

季寄  
註解

改正月令博物筌

四月部

一

詩歌連狂

季寄註解

# 改正月博筌

夏之部

## 四月部目錄

△印ハ非諧の季と持りぬ

○養生の法。風雨の如く。米の豊凶。妙茶其外人家重法のつくひ。まろくあるゆへ目錄よりしるす

### 四月

卦 月支 謝子 四丁  
陰陽生 異名

### 日令

此部より四月日の定りしるす支の定りしるすを記す

### 更衣

△襦 △袴 △夏衣 △外花衣 四丁  
△なまき衣 △あひ衣 △白重

### 青簾

四丁 女衣服 四丁

### 主水司始供永

△孟夏旬 △扇拜 四丁

### 風炉の茶

△貴船神事 四丁

### 筑摩祭

△山崎日使 四丁

### 稻荷祭

△大神祭 四丁

### 八瀬祭

△久世祭 △山科祭 四丁

### 多賀祭

△平野祭 六丁

知上

日朝



△首夏 四 十三日 △清和天 △梅天 四 十三日

△外花朽 四 十三日 △新暖 四 十三日

△短夜 四 十三日 ○長日 四 十三日

○時衣 四 十三日 △卯の花衣 四 十三日

草木

此部より四月一ヶ月のとき  
木のふいとあつたーしるし

△餘花 △まぎのむ 四 十三日 △桐の花 四 十三日

△檀の花 四 十三日 △枳花 四 十三日

△実柑花 四 十三日 △柑子花 四 十三日

△乳柑花 四 十三日 △橙花 四 十三日

△抽花 四 十三日 △金柑花 四 十三日

△雲洲楊花 四 十三日 △佛手柑花 四 十三日

△橘 △蘆楊 △まじよ花 四 十三日 △厚朴花 四 十三日

△素椒花 四 十三日 △梭桐花 四 十三日

△柳花 四 十三日 △榎花 四 十三日

○槐花 四 十三日 △卯花 △まき木 △まき木 △まき木 四 十三日

△藪椿 四 十三日 △牡丹 △花月 △津足 四 十三日

△紅牡丹 △名取中 △富貴中 △よしの △花王 四 十三日 △白牡丹 四 十三日

△芍薬 △まひと △中 四 十三日 △芍薬 △まひと △中 四 十三日

△一八花 四 十三日 ○知母花 四 十三日

△覆盆子 △艸 △いらご △鮫 △いらご △つららご △つららご △木 △いらご △なま △いらご 四 十三日

△芥子花 四 十三日 ○阿片 四 十三日

△躍草 四 十三日 △白丁花 四 十三日

○風露州 四 十三日 ○梅蕙州 四 十三日

○王不留行 四 十三日 △羊蹄花 四 十三日

○車前中花 四 十三日 △文学 △ら △艸 四 十三日

△灵光中花 四 十三日 △山菅花 四 十三日

△風車花 四 十三日 △繡毬花 四 十三日

△岩梨 <small>いわし</small>	△石藤 <small>いしふぢ</small>	△夏枯艸 <small>ふゆがくそ</small>	△茨花 <small>あざな</small>	△青木花 <small>あおぎ</small>	△木下園 <small>きのした</small>	△新樹 <small>しんじゆ</small>	△若葉 <small>わかしほ</small>	△常盤木落葉 <small>とこひまきおちば</small>	△刀豆花 <small>たけまめ</small>	△紫蘭花 <small>むらさきらん</small>	△玉卷葛 <small>たままきくづ</small>	△蓮浮葉 <small>れんうきは</small>	△猪殃々 <small>いのち</small>	△根都古中 <small>ねつこ</small>	△玉卷芭蕉 <small>たままき</small>	△茶挽中 <small>ちまひま</small>	△葵中 <small>あひら</small>	△新茶 <small>しんちや</small>	△栢若葉 <small>くわしほ</small>	△葉椽 <small>はざら</small>	△木草茂 <small>きくさ</small>	△要花 <small>くまら</small>	△千日紅 <small>せんじつこう</small>	△宝鐸花 <small>たからづつばな</small>	△岩梨 <small>いわし</small>
△石藤 <small>いしふぢ</small>	△鴨足中花 <small>かひあしなな</small>	△青木花 <small>あおぎ</small>	△盧陀草 <small>ろだそう</small>	△若葉 <small>わかしほ</small>	△木下園 <small>きのした</small>	△若葉 <small>わかしほ</small>	△常盤木落葉 <small>とこひまきおちば</small>	△常盤木落葉 <small>とこひまきおちば</small>	△刀豆花 <small>たけまめ</small>	△紫蘭花 <small>むらさきらん</small>	△玉卷葛 <small>たままきくづ</small>	△蓮浮葉 <small>れんうきは</small>	△猪殃々 <small>いのち</small>	△根都古中 <small>ねつこ</small>	△玉卷芭蕉 <small>たままき</small>	△茶挽中 <small>ちまひま</small>	△葵中 <small>あひら</small>	△新茶 <small>しんちや</small>	△栢若葉 <small>くわしほ</small>	△葉椽 <small>はざら</small>	△木草茂 <small>きくさ</small>	△要花 <small>くまら</small>	△千日紅 <small>せんじつこう</small>	△宝鐸花 <small>たからづつばな</small>	△岩梨 <small>いわし</small>
△石藤 <small>いしふぢ</small>	△鴨足中花 <small>かひあしなな</small>	△青木花 <small>あおぎ</small>	△盧陀草 <small>ろだそう</small>	△若葉 <small>わかしほ</small>	△木下園 <small>きのした</small>	△若葉 <small>わかしほ</small>	△常盤木落葉 <small>とこひまきおちば</small>	△常盤木落葉 <small>とこひまきおちば</small>	△刀豆花 <small>たけまめ</small>	△紫蘭花 <small>むらさきらん</small>	△玉卷葛 <small>たままきくづ</small>	△蓮浮葉 <small>れんうきは</small>	△猪殃々 <small>いのち</small>	△根都古中 <small>ねつこ</small>	△玉卷芭蕉 <small>たままき</small>	△茶挽中 <small>ちまひま</small>	△葵中 <small>あひら</small>	△新茶 <small>しんちや</small>	△栢若葉 <small>くわしほ</small>	△葉椽 <small>はざら</small>	△木草茂 <small>きくさ</small>	△要花 <small>くまら</small>	△千日紅 <small>せんじつこう</small>	△宝鐸花 <small>たからづつばな</small>	△岩梨 <small>いわし</small>

生類

此部より四月一ヶ月の

いさりのとありむい

△郭公 <small>かくき</small>	△子規 <small>こき</small>	△不如帰 <small>ふかき</small>	△志の田長 <small>しののちなが</small>
△勸農鳥 <small>くわんぬ</small>	△とさう	△時鳥 <small>とき</small>	

△待郭公 <small>まちかくき</small>	△初聞郭公 <small>はつもんかくき</small>
△郭公一声 <small>かくきいし</small>	△夜郭公 <small>よかくき</small>

△雨申郭公 <small>あめまうかくき</small>	△名所郭公 <small>なしょかくき</small>
------------------------------	-----------------------------

△諫鼓鳥 <small>いんこ</small>	△葎原雀 <small>わらひづら</small>
△老鶯 <small>らうおう</small>	△鶯付子 <small>おうづこ</small>

△鷹鳥 <small>たか</small>	△飛蜨 <small>と</small>
-----------------------	----------------------

△梅葉 <small>うめ</small>	△麥秋 <small>むぎあき</small>
△麦刈 <small>むぎ</small>	△青麦 <small>あおむぎ</small>

△蓮 <small>れん</small>	△竹の子 <small>たけのこ</small>
△篠筍 <small>しのぶ</small>	△楊実 <small>やなぎ</small>
△綿蒔 <small>わた</small>	△美人艸 <small>びじん</small>

△蝙蝠 フクロウ 卍 卍 △虹蚓出 ニホ 卍 卍

△蜘蛛の子 クモコ 卍 卍 △蚕眉 ハコメ △蚕蝶 ハコ 卍 卍

△枝蛙 エダカ 卍 卍 △鹿袋角 カシノカド 卍 卍

△罍の子 ウツロコ 卍 卍 △初鯉 ハツリ 卍 卍

△生節 ナマフ 卍 卍 △鯉 リ 卍 卍

**必用**

此部より雨風の占の破軍

の向方○日よりれよりは○他行の心

得○作事の吉凶○料理執立念

物のよりは等其外あるあり

い日の定まりくる事ハ口の日令の

部より此部より日のさき

る四月一ヶ月の事とあり

四月目錄終

月令博物全夏之部發端

九月内書より夏の

礼記月令より其

帝炎帝共神

祝融其日立

夏盛徳火

在とい陰氣

どころ極りて陽

熱の時節なり

このころと注釈下より



**夏東**

漢書律歷志曰夏則火

氣百木を養ひ生じと云々又夏

の假かり物假く大はて宜平と云々

○和語よまの訓と云々

○方ハ南と云ハ後漢書天文志曰日南

陸を行と夏と云ハと見え云々

○夏ハ日月東南の赤道を行くを

南陸と云ハ易統通図不出云々

○精を朱雀といふ南方火を主とし

○人の禮といふ周礼の注疏は曰踐て身

行ふと履といふ履の礼なり人の事体

を得るなり礼法身備て見事なり

てあやらざるなり○天を昊天といふ爾雅

は曰夏と昊天とと孔安國の云元

氣廣大なるといふ陽氣さうんは

して草木生ことり体なり○卦ハ

離といふ人を取て和順なりがより

離を附と訓と別まてを寄る心

より又は心を生て親と寄る心

とを○氣ハ陽といふ管子は曰其時

を夏と云其氣を陽といふ図の上

に詳なり○臟ハ心といふ人身の心乃

臟を陽を主として火に屬し

夏は配當と故は火截といふ○色

ハ赤といふ説文は曰南方の色なり易

疏は火赤ハ其盛なりと云陽乃

色なりといふ○味ハ苦といふ書洪

範は炎上苦を作ると云苦味

火ハ屬するゆへなり

夏異名

○朱明 ○朱夏 ○炎夏

○昊天 ○南陸 ○炎帝 ○祝融

○仲呂 ○丙丁 ○執衡 ○南訛

○暑節 ○正陽 ○假宣 ○長養

○氣陽 ○炎霽 ○奇峯 ○南為

和名

○むけり 八雲御抄かをそひく 同上

夏異名註

○朱明といふ陽色なり

○朱夏 ○炎夏 ○炎節 ○光明

いづれも朱明といふは同ト ○長贏

といふ物とやいふ長と云ふなり

仲呂といふ陽散と云ふ外に陰

實して中みあり

旅陽功と云ふと

其日ハ丙丁丙ハ炳

なり萬物皆炳

然と云ふ著見と云ふ強大なり ○執

衡との南方の神炎帝離る乗り  
衡を執る夏と司るなり。南  
訛とん訛ハ化あり南方陽氣に  
むらひく万物生くしをさるる

○正陽とん陽氣たじさ時節と  
く事あり。○假宣とん假大とん

いおまド物長大ふのびあくと。長  
養とん万物生長とる月さると云

○氣陽とん陽氣此月は充滿とる  
ちり。○炎霜とん陽氣ふりた

うすやうなり。○奇峯とん夏の山  
に雲の出るさなり又夏の雲のけ

した山の形は似るゆへに。○南為  
とん南方の陽氣と以く物のさると

つ事と。○炎帝。○祝融。○昊天  
つ事も註ハ夏の由来の所さるる

はぢなり 夏の朝 秘蔵抄ニ  
つやまの元のおく雲

といけてきての田さの袖さるる  
○右の外三夏ふりる物ハ別ふ部有

# 四月之部

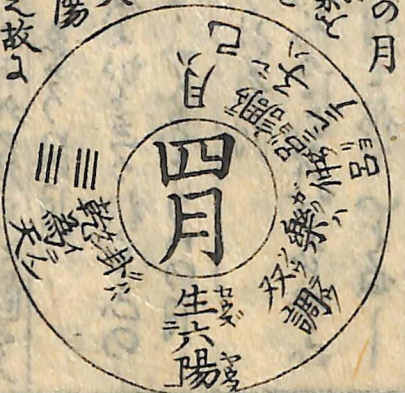
△此印ある能  
借の季とけり之

此月純陽の月

あまの精氣と  
保養して  
發泄とん

卦の乾為天  
とん乾陽

のつよれ卦之故よ  
天ふ位とるはけしこの卦



異名 △首夏△孟夏△初夏△新夏  
△早夏△立夏△之月△余月

槐夏。清和 △麥秋。六陽  
純陽。正陽之月△仲夏△外月

△得鳥羽の月△花残月△夏初月  
○これとる月△うのたふ月

異名註 △首夏△孟夏△初夏△  
△早夏△立夏△之月△余月

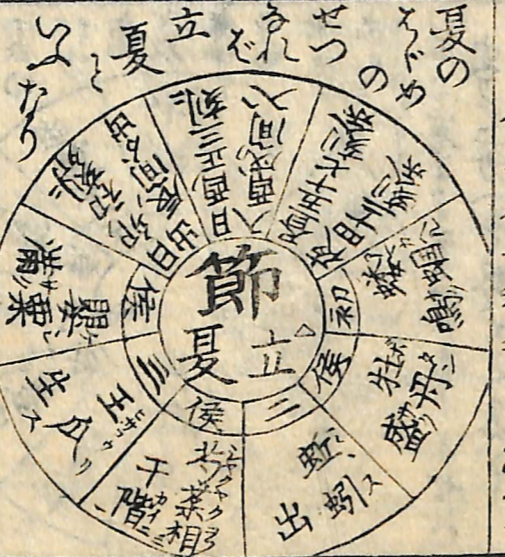
○新夏いあしとる夏と云て。○早  
夏いあしとる夏と云て。○立夏ハ四月の



節の名としてくう。乏月の月ふきと  
 ころの意。余月の陽あまる月と  
 つま。槐夏のあんじゆ花さく故  
 むづく。清和の陽とともややく  
 △麥秋のむぎ刈月ゆへ。六陽の冬至  
 と二陽として四月と六陽とす。純  
 陽の純の專の陽さかんあると云。正  
 陽の月の正の陽の至極ある月と  
 つま意。仲呂仲ハ中之呂の助  
 陽散じて外より陰中ハ在て成陽の  
 功と助。外月の花月と置  
 お蔵玉 ちりしの月  
 後の花さくはさるわくこの  
 下もやまこんちりの月  
 莫傳 うね花月  
 亥の月のつらじらさみ  
 うのさ月とちり  
 今 亥初月  
 けさうのまきとあり月  
 ちりのふねのさ

夏の節

七十二候。艸木七十二候。日出  
 入。昼夜長短委しく左小右大



蟻蚓ハ蛙之此月地より六陽生  
 て陽氣上より升りて陰氣下より

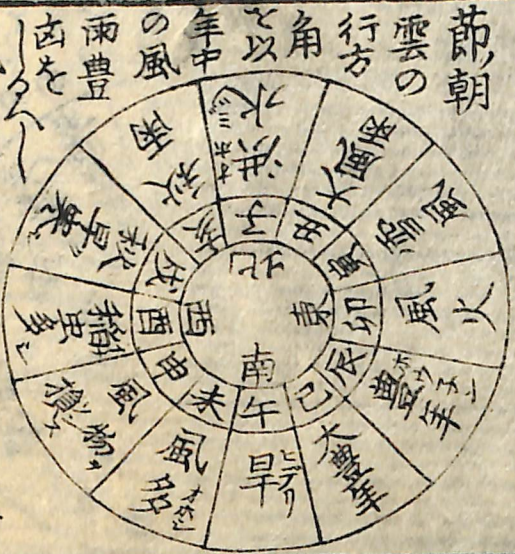
蛙ハ秋よるれが夜まき陰虫  
 陽を迎へて地上より出る熱乃

来るるに。王瓜のさうりえ

牡丹。芍薬。嬰粟。此分る  
 花さく頃をれ此月の候とす

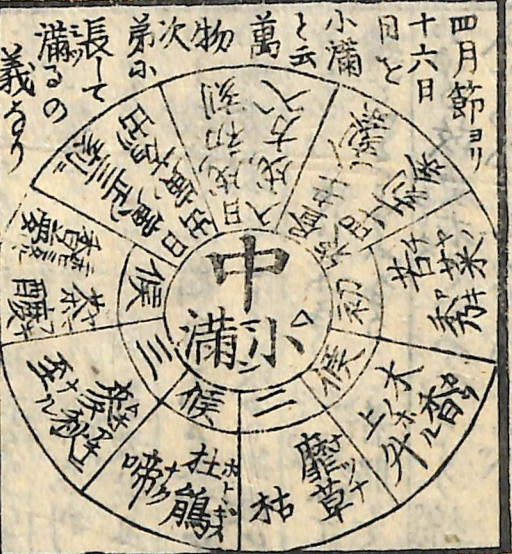
節の目 天氣占候 今日 白輪ふ

暈あまの洪水あり晴まの旱り  
 ○雨降まの五穀ふよほし○今夜  
 月まの参星東のまの山田半  
 収南ふあまの旱り北ふあまの大風  
 人病む○雲の大さ車或ひの笠  
 ねとく見ゆるものあまの時ひま  
 陽水の氣るり暑ふ至て水の湯  
 まべー○東風の必疫病の難る



○風の定まらざる時ひまとせだ  
 定りて一方へく風てとるるべー

**中** ○七十二候。艸木七十二候。昼夜  
 長短。日出等陸く左記を



苦菜の茶の事之頃秀茶と  
 つと取之○靡草のるづるの類冬  
 水より生ど草の惣名之夏の  
 火氣よあまてかろぞ○秋の稻  
 豆その外物の收る時まれば麥の  
 此月かり納るを秋とつとぞ

○木香上外○杜鵑啼○茶醸  
 香夢此皆小満の頃とた或の啼く

**天氣** 小満の日と麥生日とひ晴  
 天まの麥大い小熟と

**日令** 四月日の定りたる事支  
 の定りたる事とあらす

朔日 天氣

今日朝日の出る所 東に雲多く西晴

たつハ月中天氣は日小曇り 色バ今月中雨多し○大風吹

けバ米價貴し○西北の風吹 飢饉とらるり○凡大風雨す

是バ秋大水あり小雨風す 秋の水とくふし晴まハ旱リ

○今日雨すバ豊年二日小雨 ふまバ水多し三日の雨ハ旱リ

更衣 △裕△綿拔△郊の花衣 △あつ衣△橘衣△あひ衣

△白襲又白重と見くハ刺 白し綾或ハ平絹白くハ禁中

の御装束今日より改る。御帳の かしらとさしふるハ胡粉みて

繪とかしらとふるハ着服を かつ故更衣とす今日より綿

入とかりてありせむとすべし

女衣服

衣裳の色ハ定め 衣袋とともざりしとあり禁中

下帯ハいふハ前をせむとびびり たるはえ○昔ハ民家にて今日より

院方の女觸ハ四季とりハめさる

ちりとすつたの集れたハおのり かつととやとれたるハおのり

夫木 俊成 友之れを衣とすつてふつとハ

うつとハかたつとハあつとハかたつと

同 田舎更衣 仲正 かつとハあつとハあつとハあつと

詞 友之れを衣とすつてふつとハ ねとつとハあつとハあつとハあつと

衣ハあつとハあつとハあつとハあつと

衣ハあつとハあつとハあつとハあつと

〔連〕山吹のそむきとさや及宗祇  
〔俳〕てを我をたすやうの蟬衣 芭蕉

〔大〕酒をたて物うさこ裕る其角  
〔初〕給とぐに清ぬぐ方工部移竹

〔誰〕もくも中らりせの若初部立圃  
〔て〕はのれもわろきふつる夜十摩

〔若〕指たまかまほりこもく人西鶴  
〔二〕日てたふくき給う那 鬼貫

〔夜〕久新巾一つ出来はかり之道  
〔狂〕ぬきそくもくもくもくもくもく

〔魚〕の腹もや卯たるらん貞徳  
〔主〕日簾 殿は新に御簾子

〔お〕 續拾遺 土御門院  
ひまもきていそ知らん玉とを

〔非〕み後ほつろくはまき嵐嵐雪  
〔猶〕多たて内を床さきま虚白

天子へ水と奉るなり 延喜式は出さる  
天子のよん 夏季の改る始小臣

御酒とたび扇と頒ち 給ふゆへ  
△扇拜とも云今絶すり 出さる

〔お〕 年中行事哥合 殿中將  
法人のけりある神ふかりあり

〔風〕爐の茶 三月廿日炉とるさだ  
朝日より風炉のりる

〔京〕 貴船 近江 △筑摩祭△鍋祭  
△云此里の女

嫁入や鍋とあづいて神事出再ひ  
とあへといひ二枚ふた幾度とせも男

〔非〕 格とて福かかき方おろしな貴  
りらるる数程鍋とるさ参へ 或は初

〔二〕 京 調子村祭 山崎の近所  
圓明寺小倉大明神祭 能

〔日〕 京 調子村祭 山崎の近所  
圓明寺小倉大明神祭 能

〔日〕 京 調子村祭 山崎の近所  
圓明寺小倉大明神祭 能

〔日〕 京 調子村祭 山崎の近所  
圓明寺小倉大明神祭 能

〔日〕 京 調子村祭 山崎の近所  
圓明寺小倉大明神祭 能

三 天氣

今日天氣晴も夏  
中風雨頃めで五

穀豊年也たまによつて  
米と商人輩四が三と唱ふ

此日一切の血を  
京 山崎使  
山崎離

宮の社人行列を八幡へ参る  
俗は長者  
形はハ

○宇治黄檗開山隱元禪師忌

近江 山王神御出。夜半頃大津四  
の宮へ御出是山王のおびえ

祭の日神幸のさだ大津より  
大宮の拜殿ふかへへ入を奉る

上 京 △稻荷祭此月外三ツ六ハ  
中の外れ日へ 弘法大師

東寺造営の時稻と荷ひする  
翁の現しあふ神へ初午の所棲

あまうたうだ 是稻荷山の鎮座  
の時大師其面容を自らさごみ

給ひて神事の最初祭とあつ  
神奠ふかへる面くとしつり

大和 △大神祭 大神といは三輪の神あり  
大物主の神の御へ  
宗信法眼

我君の御代マはくへん行りふも  
おほの神のまうりありせは



上 京 △八瀬祭 辰三ツあはれハ  
中の辰日行りあり

上 京 △山科祭 北山茂登岐明神  
祭 △久世祭 三ツ己あはれハ中  
の己とあり

近江 △多賀祭 △堅田祭  
○三井寺 早尾祭

上 京 △北山イカダ  
明神祭

上申日 京

△平野祭 貞觀年中 二位中將

柳とるのみ月末ぬりし人の  
手抄の書ふゆへなる

大和

△當麻祭 祭 河内 祭 近江 祭

上西日 京

△松尾祭 貞觀年中 貞世

ゆへ松さ次松の尾山のみま  
いく代らりぞくまのあらん

梅宮祭

△梅宮祭 橘氏の祖神あり

⑤ 年中行事哥合 秀長  
神多るお月の掃りて  
梅のえあふ多つるは幣

河内

△當麻祭 祭 上 近江 祭 大津

四不成日 就日 天氣

今日雨降り 南都 五穀貴し

△水屋能。四日五日あり 地人能く

大坂

天王寺講堂 結夏 音楽あり

大和

△廣瀬祭 △竜田祭 右兩社同日 又祭あり 大忌風神の祭と云

天武四年小風神とタツタツノ小祭り大忌神とヒ豆野ふまらると日本紀小出と風水の難とのぞけ豊年といのる神

五日 京

神足 六 江戸 目黒祐天寺千部修行十五日と

七日 擬階奏

是は二月は列見とて六位以下の藝能ある者

を撰て式部兵部の二省より  
ひこしてまのら上卿升達を

札に記し置き今日持てまのら  
を大臣より取て奏聞せらるる

大坂

住吉小八 今日強さへあま茶  
算會 日 ともひひ出る

天氣

未の刻大風とまる昼雨れが  
豊年之夜の雨の宜い

禁忌

遠行旅立ちとるの悪し  
○草木と切打とといむ

灌佛

△佛生會 △浴佛 △佛の湯  
△龍花會 唐小も寺にて五香水と  
以て佛ふゆあす

△花江堂△五香水△つじ仏は奉ル

○五寸六歩の釈迦の像と造り金乃

鉢の内へ金と衆僧法と修す是世尊

生且多ふ時天竜産湯と奉一象こ

◎年中行司 咲池か月のくんとかぶ

きい多かり久しき法のたふさを

◎俳 妻飯と母たをて併生と云其角

せろんの虫のなぬ法 左の哥とせろんの桂

◎とーてのくろ月八日の吉日よ

かきさけむのせいといとよる

京 山崎天王祭○大原 大坂 住

大嘗會○天王寺講堂佛生會 午刻音兼

○同所太子堂結夏開關 午下

山城 比叡山花摘 ○戒壇堂

光立寺 南都 奥福寺佛生會

開帳 伶人舞祭。奇樂会と云

大峯山 今日より始て上戸用

といふ九月八日まで

役行者この山の岩窟小金剛胎藏の法と修と千百余年ある

九日 京 清水寺 不成 天気 晴天

十日 天気 晴天の豊年なり 諺云 今日黄昏時分と見よ

日月對してせの秋旱なり 東南風の豊年なり

伊勢 △神衣祭 麻積連麻うもて 神明は奉るをいふなり

大和 △練供養中將姫の忌當麻寺 小て行ふ真言浄土兼学の寺に

十五日 夏入 佛家ふて一夏九旬と云 禁足とて夏あつりとつゝ夏

地は草繁茂し虫多く出来 ちと踏殺さるゝく是を安居

と云ふり夏十九下出たり

京 五山乗拂一山の衆徒と集め 禪師拂子と取て高座に登り

偈をのみ諸禪師と問尋せしむる  
○東山新熊野大般若轉讀年々修行入

江戸 小松川善導寺中將姫の筆  
阿彌陀の像 用帳

大坂 天王寺塔會午の刻に行ふ  
昔の天王寺七村より鉾と出

祭りの時其時の移りよめ、馬具  
面人形を村々社内におも有とく

天氣 雨ふれば豊年の暮時日  
月と見ふふ相對して照ら

せび秋早き。月のゆるごと早  
くして雲は紅色ふくれん大い

ぞりきり又月のゆるごとこれ  
そくして白き雨とつとさどる

十六日 京 安珍寺鬼子母神祭 三井  
と同一く今日修行と

江戸 杉妻稲 近江 三井寺  
荷祭礼 千團子祭

願ある者たんとぞと千くらへ鬼子母  
神へまゐりまると參詣しむべし  
くるまより千くらへとて

中子日 京 △吉田 中辰日 京 △向日明  
祭 神祭

中夕日 △近江ハ幡祭 蒲生郡八幡村在  
後世ニ至リ 後日杉山祭神石清水同

中午日 京 下賀茂 大坂 玉造稲  
御蔭祭 荷御出

近江 △菅宮祭 中申日 關白賀  
祭神三社

茂詣 御車之地下殿上人前驅  
あづま遊び駿河舞をど

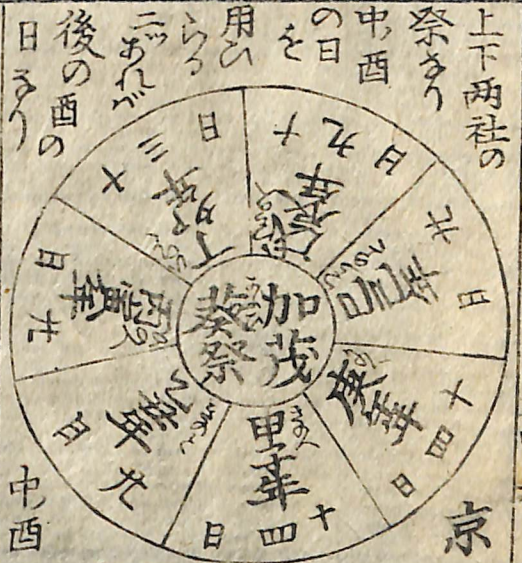
の神事ありと公事根元ふ出たり  
中加茂△國祭。加茂社ハ山城国の地主  
故今此祭ハ國の者々祭るべし絶た

了ぬ日の祭ハ内裏より祭らせ玉ふ之  
近江 坂本山王祭 俳さで活やむ  
うらみぐらうの起るう風鈴軒

中酉日 加茂祭 上加茂みけいろうら乃  
御神の下加茂の神躰

御祖の神をうり△祭りとせり  
いへ此祭りよめかたふやう





今日人々葵のつとむる  
 用ひ 後の酒の  
 御形日 神生とも各今日加茂の

葵祭 今日人々葵のつとむる  
 用ひ 後の酒の

御形日 神生とも各今日加茂の

葵祭 今日人々葵のつとむる  
 用ひ 後の酒の

御形日 神生とも各今日加茂の

葵祭 今日人々葵のつとむる  
 用ひ 後の酒の

年中行事哥合

頓阿

神心のおんを盡てたがせけり  
 のころさうさうとがげしうけん

夫木

西行

ふん車は形の志あふし  
 あまのりよふよとるしとをそふ

詞 神も嬉し。何れをさるる葵天女。  
 みあまの山 洛小たうの川のやうりひる

丹わりの矢とみとてせしあじうが  
 不の名をりのて神よ名射をりし

ふよある。葵うらる。葵車。鏡  
 車。物見。蓋 是神をりし

連 ちあてく世々葵の二条宗牧  
 我をを中りよふて祭るか 去路

在 ちあましくもかた神の祭りと  
 みせに葵とそんるかさうて常集菴

中 戌 京 土焼 祭

中 亥 京 嵯峨祭 是則愛

岩権現の祭 祀あり祭る神  
 二座伊弉並尊一座 火産

靈尊一座と云むうの平安城鷹峯東又社ありと光

仁天皇御宇天應元年秋の慶俊今の靈地より一奉

ふるり神輿の山下清涼寺より出つ土人の女屋基小て

舞ひ或ハ傘鉾を出し風流之

△中山祭 神酒の冷泉院に

はりする石神これより天喜元年四月よりより先その

官幣と奉らると云十 大和 東大寺使

是中西日るるべし 諸国ありの紀州若山御祭殊の

美麗△和歌祭と云△雜賀祭はふ

日光山 東南の風を真風

○南風ハ早 西北風ハ洪水

東北風ハ水西南風ハ平より

京 泉涌寺雲林院 如法經會 廿九日

衣とる是と花供とつ今高野

金堂より學侶の僧薬師會と

修行し花を供とるの日と大師の

御衣をかめり日と同日なるゆとと

北 伯耆 大山 天休節 〇

晦 夏駒牽 〇小の月あけハ

天皇武徳殿又出御より庭上

不御馬とひさ渡と白馬の節

會のあり此ハ来月騎射の

馬射人あけびく御覽せり

あけり負觀の頃よりハ

ト免らる猶延喜式ふくじ

北野御神事 音栢御供

○新日吉祭 昔ハ今日近世ハ五月

月令

此部ハ一日の定まりぬ四月一ヶ月の事をさす

神祭

此月神事多し一名をさくれば季にさる

齊刺

神祭せんとて松竹柗をさく事あり

金葉

此の春お月のことふじこめておろしそあれのほともあり

神取

△神さく 是るる祭乃加ざりて江次第委し

△神心とるふふおしく柗を宗祇

三枝祭

卒川祭をいふとらや三枝の花と酒樽小り

ざる故にうり神祇今小夏の祭の所ふ載らるる(云)年中行事哥合(道大納言

あおのえと枝の花とも向や柗乃のほまへよ中酒をいふ

茶誥

宇治よて今月挽茶壺へはめるあり上品と鷹の

凡といふ銘い極上と凡と拾叟袋ありて壺へはめるとい極そと中そ

とそとつ少し次なる茶をてつめ封あるえ又其次なる茶の上と初むり中と

中むし下と後むりし銘と是はた袋ありてつめるとて濃茶用るふ

ちへつめると次なる茶の薄茶は用る今月諸方へ出るといも茶事ハ風炉

の時節より炉と重どるいよりて此茶の口切るとてつめ方にても

九月より後ふとらあり○弘仁六年江州志賀にて崇福寺永忠僧都茶と煎して奉る

や、あれとも其時ハ日本ハ茶は皆唐茶なり建仁寺の梁西

和尚宋ハ入て茶のくみと得たて明恵上人これと柗尾ハ裁し

よりあぬほく日本ハひろまりうりそれよりして柗尾と茶山ととい裁し所と深瀬と云て今あり

**煮酒**

京師是と酒煮くつて酒肆やこいとき

ずやいひまじい飲しむ是を酒煮の祝いとひる

**矢數**

△大矢數も云 洛東三十三間堂とて此事

とらん弓の天下とらん矢を通とことむりより四月中旬ふ極まけり日のあふれとりつてのゆくなるべし

**松前渡**

商人蝦夷松前小渡る冬春の寒氣強く

渡りかへり故に此頃渡り秋上るべし

**時令**

此部より四月の時侯より事とありむ

**首夏**

四月の異名をいふもその只夏の初と云意に

新古今

素性法師

をく見ともあふぬ春もあつりゆ

いとぬきつるまごころもりか

建保百首

定家

大井川のりぬおせはるのまごころなるさひたりと衣をひる

新續古 首夏風 左大臣

吹風もややいとらん花の香のうとれたりし秋くまへ

詞ちりた。夏のを氷はあつり。清みどり。お葉はひるる。こむろ乃楸。まのふはまちり秋つた。ま葉はま

春の休ては月はま。夏の来る

非等とみるも卯月のあつる思貫ひくくともあふるのひるおけ移行

狂言二月つものまごころ異竹の殺敷とさふまへとひたり 六谷

詩 首夏五字對句

清和未換衣 風光夏葉初

セイワイイダカヘコロモヲカセハテルカヨクノハジメ  
ノドカニニテアツカラス ハナクラニカセアリ

幽僻還聞鳥イウヘキマタキトリヲ 花落春鶯晚ハナオツルニユウノウクレ

詩 首夏七字對句

詩礎

西灣水綠堪銷日セイワシニミヅニドリテタタリシメスニ

列樹雲レツジュノクモ

南浦花紅好送春ナンポハナクヒナイニヨシオクルニハルヲ

艸綠春クサキニカハル

詩 首夏之詞

明 郭享貞

巡簷燕子掠晴絲隔水茶烟メダヒキヨシカスメセイニ

出院遲シユツライシツキ 燕メノ片々トヒヅブハ晴天ノ糸遊ニニガフ川ムカヒノ

茶ヲ煮ル烟ハ風ナキユヘオソク立ノボルナリ 艸色入簾サテマヤイウツシニ

人到午風吹暖夢回時ヒトニズイダ 青草ヒトニズイダ

盛リニハエシゲリ人ノ来ラサル処ホド繁ル午夢サメル折フシ風

和清天和のてん 梅天。つゞきも四月ノソヨスナリトソ

天の詩は孟夏清和天天の詩は孟夏清和天云周之書

源氏胡蝶はつゞけて又清源氏胡蝶はつゞけて又清

夫木夫木 小大進

雲とれて月とみ淡る夏の夜雲とれて月とみ淡る夏の夜

卯花朽卯の花とみ 頃日の雨とつゞり頃日の雨とつゞり

まり哥は三月ふも五月はとまり哥は三月ふも五月はと

山里の夕の花を守る糸山里の夕の花を守る糸

新暖しんぐん 四月の頃日々ふわつてふ四月の頃日々ふわつてふ

短夜ミナトウト 日と春と短夜と夏日と春と短夜と夏

長夜と秋と短日と冬と長夜と秋と短日と冬と

長日ながひ 唐の文宗帝の作り唐の文宗帝の作り

夏日長と殊小頃日未熱夏日長と殊小頃日未熱

時衣ときぬ 若撼衣若撼衣 小千草色小千草色

瞿麥衣 あはれそがうをい  
おろも あはれそがうをい  
黄きり

草木 あふの四月一ヶ月乃  
らさ木とあり心

餘花 あふの四月一ヶ月乃  
らさ木とあり心

新拾遺 内大臣

別々のほおぐとやゆく春の  
日教は花のさたゆるうん

家集 山餘花 雅有

続古今 残花 俊頼

詞 枝小すくふさ。涼さ本ぐくま。  
あ奈はよりふ。まはれ見。風のすま。  
教は。まはれ見。いりる。か入る。

桐花 白桐。黄桐。紫桐。檜  
桐。是皆桐の種類也

梧桐 桐の似て皮青く疎皮を  
日月の関を知るべし都

十二葉あり下よりかえて十二葉  
の中の小葉もその其月関也鳳凰

乃栖此桐あり

寂蓮法師

俳 移中も寝てえせる桐相来雪  
庭造り並ひてゆじ相のた其角

檀花 杜仲。思仙。木綿  
頭輔

若のむす岩うたあそ色こり  
是と嵐よあせむら

枳花 時珍曰葉の橙のまぐ木  
橘のじ白花とひら

詩 枳殼之詞 雍陶

澧水橋西小路斜 ホツイヨコ道  
川ツタヒニユク

日高猶未到君家 オタクへ行ツ  
カスニダハツスギ

村園門巷多相似

ガイレノ同シ  
ヤウナイハナニ

處々春風枳殼花

キコクノサイ冬所  
カセアタハカイ

蜜柑花

大和本草其花をナ  
タチナトク多ク云

柑子花

○花柑子とも云  
夫木  
け程のい葉智人者

依て後、橘も花柑子引、慈田

乳柑花

○久年母。花  
橙又似、  
橙花  
正  
姿

柚花

樹葉皆橙、似  
花甚香、  
金

柑花

白  
雲、  
橘花  
花  
白

佛手柑花

実熟して人の手  
に似、  
故名、  
づ

橘



包橘、  
盧橘、  
軒生  
草、  
昔州、  
庭古州

とよ花の橘の柑類の惣名也  
だい、  
く、  
く、  
んの類、  
と、  
と、  
ら、  
ら、  
ら

かり世よたららるゝ称する物の

包橘あり ⑤万葉 三方沙弥

橘のあやむじまらのやまを

ゆのそそけりいもふあをそそ

新古今

通真

行まぬ誰せぐとそ夕風

響うらとらむ宿のしら花

同

家隆朝臣

今きより花咲そひらまむの

いうそ昔の者ふ白うそ森

家集 風詠 盧橘香 清輔

君り代も枝もるゝとそ吹風の

そふまむの白ひらそそふ

夫木

閑居橘

光俊

たちりるいけ下のやうれこひるを

のうら、  
中、  
ふ、  
う、  
て、  
と、  
う、  
ん、  
ま、  
こ

同

夜盧橘

如願法師

あふれぬとふくまをさうゆの

そぶらうのこふ白くそらりる

同

里盧橘

隆祐

あふれぬとふくまをさうゆの

そぶらうのこふ白くそらりる

詠句 句々笑う。さうさうの月。社の香ふじうと夢人ひう 梅の

連横 句々笑う。さうさうの月。宗祇  
俳者句 句々笑う。さうさうの月。其角  
雨 句々笑う。さうさうの月。鬼貫  
狂 陳皮よあつぬさよりまの  
句 句々笑う。さうさうの月。貞徳

古里 朝陽。又月雨

詩 橘五字對句

楓樹隱茅屋 白花如霰雪

橋林繫漁舟 朱實似懸金

銀章自謁人臣力 歲寒心

玉液誰知造化功 度玉岑

珠顆形容隨日長 處々紅

瓊漿氣味得天成 嘯橋林

厚朴花 葉擲の葉に似て鋸歯は 大なる物尺及

秦椒花 山椒ともかく味ひう

櫻欄花 花の初魚の孕心子

櫻筍とて漸く長くして花

總とてみそ淡黄色なり

夫木 為家

胡まごれ指ぶるりなるたて

能掃のあひ日わと櫻欄の花度江



椴栲の皮一年に二三度あるいは  
四度剥べし剥ぎれば木はさかす

長ぜざるゆへ皮を剥ぐ葉はあつ  
所より剥初る葉の付くる所

中いれれば葉がつた **栲花** 正字  
とふ時ありし **栲花** 押し

○栲つた七ツの妙ありて多壽ニ多  
陰三鳥の巢をり四虫くひ

と五霜葉玩あそ比六実こ多七落  
葉は多くほして文字と吞べし右を

栲つたの七た **榎花** 非たまたて多の花も  
絶と云 **榎花** 中は異さ引出齊

○夫木川端の家の栲つたとあは  
ちち初人の家はぬいなる 為家

老 **槐花** 今月花咲 **卯花** 槍の  
実は秋く **卯花** 花

**名異** 白く荊げ花。錦きん帶たい花。空くう疏し揚やう櫃び  
花。志し見けん草。雪ゆき見けん草。初見中

夏雪中。垣見中。卯の花といふは  
つとむるの中畧り多く箱根うつ

ぎぎ 十姉妹。花いろく △岩本う  
つと△里う川△三葉うつき

○新古今 白河院  
卯の花乃はびくさけの垣根をば  
きるれ力の新しんとぞえふ

は 太宰大貳重家  
卯のむね咲ゆる白く人乃  
波りてゆつる垣かきとそむる

夫木 後京極摂政  
里人のうのまかす人山うけみ  
かた雪よめひうととと人

家集 水辺卯花 西行  
立田川うけれまうれをえとせし  
おせれのみまにまう卯のむ

家集 卯花似夕顔 匡房  
卯は見えははくひはほと夕顔の  
垣かきよまろくさけうれむ

夫木 卯花似月 為家  
久うその内けうけととあつた  
かづのささけさける卯の花

嘉祿百首 河卯花 為家

久しきのつるの河乃卯れむを  
月うけくぬく文々まのそ

五社百首 暮見卯花 俊成

志どろひのうつろふの追風  
はつをまざるさしれ卯の花

夫木 湊卯花 定家

かふるまのゆめへいこふ吹風  
ふもそそむる岩れ卯の花

夫木 舟路卯花 家隆

うねまのうきやまのつる人  
夜をむとらふひよせてん

明月 山卯花 教定

袂うたふたむけとさく袂  
うのむさけるゆめのさうさ

夫木 社卯花 定家

ふねさるるこゝろあやう屋  
ゆめをさけくかふるうのこ

鳥羽殿哥合 田家卯花 俊成

小山回のあろくふはけて  
あ月まのまの花れさうそ

夫木 卯花繞家 寂蓮

卯れむのかさひのまふまがむ  
いせわろりどめくうさう

金葉 卯花連垣 匡房

つまをりかておまし山雲の  
根根はくまは笑るうれさ

千載 遠村卯花 政平

うれまのそとせめくうさう  
かさひのさうりあわらさる

後拾 山家卯花 通宗

後絶てまろくもるれ山ざん  
我のこかんよと笑る卯の花

詞 白妙 雪音 名目 月 山 山雲の 怪 露

の月。山後れ雪。さびくまの  
間 かの野 ころさ系。分ま

川さるるあけまうま。お笑の波  
のまうらうのまのまのまの

雨郊のむさう。卯月の時鳥卯の  
花の陰かた。卯のむさるる

木陰よのるり。ささるる雪 森

表の下りけ上垣あがが垣のふら  
の垣の卯の花垣ういさ垣

④連あう言せうれ花のさうり小宗砌  
卯の花はくさる垣や小宗春

⑤卯のむやつまのいおのか後後其角  
卯のむいほも廣つたういさ井蛙

⑥卯の内一なれは卯の卯本貞徳  
狂卯のむいほおくさる白雲と

冬不審のそく  
たつらん貞徳

ヤぶつこま五月女  
真の條  
小委し

# 牡丹

名異 木芍薬 魏花 鞞 紅姚  
紅姚 黄国色 天紅 魏

紫馬紅 裴白 鼠姑 紀羅老紫  
葉庭紫 牛家黄 狀元紅 二百

草 深見草 名取草 富貴草  
△鎧草 △花玉 ○とまり草

⑦草庵 頌阿  
咲あうりなれそい文のぬうとま  
さうせもんの花ふるるむら

玉葉 愛牡丹 師兼

細るあふそりるんもあうとま  
梅うりあるむの色う那

⑧詞 花のとり火知身いひもあ  
うり。あう花とご。あうあ。さうく

咲の哥よの春入連能あ夏まり  
⑨俳 ほととぎすもあうや北日家宗内

ハもとうらふあや牡丹の其角  
牡丹のあひあつうらああひあ移竹

⑩狂 花の揚解いりやうとあうと  
こらああまの花あ月うつく柳因

⑪詩 牡丹五字對句

イタマカアヒンダハイニニ  
イカウヒラキギョウガウニ  
味嘗貧外見 異香開玉合

フヤキハナナハ  
スニチチウニヤルケイフン  
不似地中生 輕粉泥銀盤

⑫詩 今七字對句 詩礎

ケウエントヲクワカルキンヤウソウニ  
ケウエントヲクワカルキンヤウソウニ  
曉艷遠分金掌露 正開時

暮香深若玉堂行 浅復深  
ボカウフカゴトレキヨクダニユクアタタフカシ  
コトヘトブルクカタニホヒ  
イダヘニル

群芳盡怯千般態 有此花  
クンフンコトククオスセシハニタイアリコノハナ  
コノハナバカリ

幾醉能銷一番紅 醉數杯  
キスイヨクシヤウスバンコウエラスハイニ  
ミコトナハニサケノキヤウモニス  
ハニエウ

詩 牡丹之詞 唐李太白

名花傾國兩相歡 常得君王  
メイカハナイコシカフアヒヨウフツチエタリトモ  
オヒテワシラヒシラ牡丹ノ名花ト傾國ノ

帶笑看 美人十兩ツナガラ君王  
オヒテワシラヒシラ牡丹ノ名花ト傾國ノ  
ノ御氣ニ入ル故常ニ君王笑

解 秋春風無限恨 沉香亭北倚  
ノ御氣ニ入ル故常ニ君王笑  
ヲアツミテキゲンヨク向フトツ

關干 此兩品ニムカハバドノヤウナ  
ランカンニ此兩品ニムカハバドノヤウナ  
怨恨モ忽チニウチワスル

詩 飲酒看牡丹 劉禹錫

今日花前飲 甘心醉數杯  
コンニチクハセンインカンレンヨラスハイニ  
今日花前飲甘心醉數杯

酒宴ヲナスナリ 但愁花有  
サケウチヲナスナリ  
但愁花有

語不為老人開 蒼モノ云ハ  
ゴトタメニラダジンノヒラカ  
蒼モノ云ハ

為ニ六口ハヒラクニジキトナリ

牡丹 花中之王 錢思公カ説ニ白  
牡丹 花中之王 錢思公カ説ニ白  
花ヲ第一トシ紫

花ハ其次ナリト云ヘリ今櫻ヲ  
花ハ其次ナリト云ヘリ今櫻ヲ  
木ノ王トシ牡丹ヲ草ノ王トス

沉香亭 唐ノ明皇ノ牡丹  
チンカウテイ 唐ノ明皇ノ牡丹  
ヲ栽ラレシ御殿也

白牡丹 花潔白ヨク愛  
白牡丹 花潔白ヨク愛

詩 白牡丹之詞 狂 依蝶と待まの依りし花されど  
詩 白牡丹之詞 狂 依蝶と待まの依りし花されど  
とく牡丹ハ白ヨク愛する 貞柳

長安豪富惜春殘 爭賞ハ  
長安豪富惜春殘 爭賞ハ

新開紫牡丹 都ニモ春ノ名殘  
新開紫牡丹 都ニモ春ノ名殘  
ヲオシコ牡丹ノ花

兼露路冷無人起 就月中看  
兼露路冷無人起 就月中看  
上牡丹

丹ヲ白銀ノ盤ニ 見立テ作レリ

白牡丹

種類 三回。五重七重  
花びくあつくはやあり

○あし菊。五重大まゝん○白縮。六  
七重大まゝん○出雲。六七重中まゝん  
○香久山。三重大まゝん○袖の雪。大  
まゝん二重まゝん

紅牡丹

種類 深井。大まゝん濃  
紅りのあざかさの多し

○筑前。中まゝん色濃七八重いろ  
蠟紙まべ少やうらむるべし○志は  
凡大まゝん薄紅より紙まゝんいろ  
よはくまたるべし○朝日山大まゝん  
五六重丸咲○見越。濃中まゝん八重  
○妙覚寺。大まゝん四五重○廣沢。大  
まゝん四五重○握々。大まゝん九重○  
待夜。中まゝん重より○山里。大  
紫菊まゝん○大紅。大まゝん黒紅よ  
らじろまゝん九すまゝん一尺まゝん○乱紅。  
中まゝん五六重紅色より○濱紅。  
大まゝん多し○小泉。色中紅まゝん

花まゝんまゝんまゝんまゝん  
まゝんまゝんまゝんまゝん

芍薬

異名 將離。花相。犂  
食。餘客。和名△あひす

草。かぶよ艸。秋根まゝんて薬  
用とまゝんまゝん

非芍薬の四まゝんやまゝんの群衆 立圃  
芍薬まゝん骨折まゝんゆまゝん移竹

狂咲まゝんや牡丹と百合の中まゝん  
あしすまゝんまゝん芍薬の花 常樂菴

詩 芍薬五字對句

幸因親切地 孤賞白日暮

還遇艷陽時 暄風動揺頻

詩 芍薬之詞 唐 韓愈

浩態狂香昔未逢 紅燈燦々

緑盤龍 昔ニヨリカ、ル色香ノ風

カナル如ク葉ハ青竜ノワタカニルニ

似夕キタツテ来獨對花タテ情驚恐知シヤキウクハスニ

在ニ標宮第幾重キョウタイイクタウニカハルメツラニキ 八十八仙家ニテ

毛幾重ス

芍藥名花

関守。血三重紅の中赤黄うこん交。

○小夜雨。血三重隨分白○金孔雀。血二重や紅○白砂金。白三四

重○たつき。薄紅二重花中うん白○錦木。血紅三重りのあが黄色金

杜若

燕子花やよ花やつとて本邦久しく誤り来れり

杜若の香草あり此花の正字馬蘭本名の荔苾実あり

○建久百首

定家

おしとろや下葉ほまどふ杜若

拾玉

杜若写水

慈鎮

杜若うげゆかふれとつらゆるあといくそをそとそと

山家百首

水辺杜若

仲正

雅く後山下あのかさのともくしんをい深乃をふ咲く

○哥の部立ふれつとて春ふとあり連俳より夏より詞派

山下あり。核衣。うら夜。そらく。名所へ。後若。八摺。志賀。昆陽。

廣は。池あり。地沢。花うくむ連あどあより清一杜若宗春

俳俳葉まけぬかたる杜若其角五の目や門控てむかあり信徳

狂狂あてどくふらのあやめつら林鳩ゆるやゆるとにぬかたり雄長老

一そいこうぞかき信海法印

杜若名花

信海法印

○就鳥尾。ろりえん中  
○羅生

○濡鷺。まづあきだ  
○薄雲。白

むらさきいろさきり ○ハツ橋濃じりさ  
き花首は葉一枚つゝ出る莖一本  
五つつゝ咲一番花二番花といふ

知母花 花青く 一八の花 名異

紫羅草 鸞尾 和名は余野討と  
書に花紫ゆいで杜若に似たり

覆盆子 種類 ○蛇母 ○蓬藁  
○蘆 ○樹母 △草

△くらら △まひら △はつら △べ  
しり △まきいら △てて夏花きんもの

王孫花 異名 長孫 芥子花

一名米囊花 ○聖粟花 ○象穀  
御米 俳 けーとくひとふ

らるあとの須弥いく川其角  
る色いこれあいかのけーれ花立圃

トウ ヤガハ合とるけー坊と宗且  
百斤とよるまけーれ花訥子

阿片 ○鴉片 ○阿芙蓉 ○阿片  
の青皮とさう裏面の硬皮と損す

午後大なる針とりのて其外  
を以て製と尤

久遠の妙茶より 躑花 花葉

のりん生ご人笠を 白頂花

名づく花白く小じ 梅蕙州 花

風露草花 花白梅 梅蕙州 花

玉不留行花 ○金盞銀臺花  
俗とくさ 羊蹄花 ○和

艸とくさ 羊蹄花 ○和 車

艸とくさ 羊蹄花 ○和 車

前草花

○異名 牛遺。牛舌。車輪菜。花穂。

文字摺

○綻摺草ともかく本名いまごつまびらき

靈光草花

○鷹爪。花黄。畧。绿豆。似る。実同。

山昔花

○白花。冷。紫と帯ふ。

繡毬花

○白花。集咲。岩梨。二并。

石籐

○青つら。つら。花葉。紫藤。似る。紫白の二種あり。

夏枯草



○葉。す。ち。如。花。紫。あり。

宝鐸花

○花。鈴。欵。の。ま。倒。垂。る。青。白。色。あり。

鴨足草

○異名 鏡面草。虎耳草。花。淡。紅。色。

茨花

○薔薇。△牛棘。山棘。牛勒。実。と。營。実。と。

名づく野生の紅白二種あり人

家小蔵のりの花の形色数品あり

○晋 六帖 我のひささういそつるたの

るるかあごさるのとのいひかうた

千日紅

○花の盛り久しくして百

青木花

○花紫。黯。色。あり。美。る。ん。葉。常。盤。あり。

要花

○扇骨木。正字未詳。ら。寸。小。白。花。を。ひ。く。其。

樹最も堅硬して扇骨とをす。堪。う。り。故。は。此。名。あり。

盧陀草

○著。波。三。礼。草。近。世。南。蛮。より。來。る。艸。

新樹

○樹。植物の總名。新。葉。の。薄。翠。を。云。

新古今

曾根好忠

花らしるの本は向もあふ合て。天。照。る。月。の。影。ぞ。も。れ。な。る。夫。木。

夫木

定家



くけ志々記あるのそくし日記して  
ゆづりくろく山乃をそすく

玉葉 庭樹結葉 院

さくあて枝みくふさうりぬま  
松のふよせもせうしうりく

新續古 山新樹 左大臣

それくふ志くせと葉まじり  
花うそ及の本末ありしと

詞さうぐく前る神さひの表。邦

山の葉。恙相。赤葉。あま三月  
りぬま。あひのひと葉

若葉 新樹又同一諸木の  
葉の若やうまるといふ

非二三まひ同ふ余とと葉葉外移竹  
湖分彩もこ二井の若葉紫くか松雨

わくく葉 病葉といふ。若葉  
の内まれば赤く又い

白くあまひい黄いろいひもぬ  
といふ邂逅といふ夏いてはくわと云

木草茂 草木の繁茂ともい  
茂草蔚林かといふ

木下間 木晚。万葉といふ木  
くれしよむ木の茂る

万葉 木晚のゆふ雪ありに叶る  
いろくみ家くまはとる

葉櫻 連花の本といふい  
志すのあまふる宗祇

非なみ橘やちよひ月夜とこ一  
文鯉 葉さくマも中の人の夢いり 希因

若楓 楓の字九月の所小注す。  
八入と称とるもの若葉

紅色のて四月青葉ふらう其  
外冬紅色さるもの今月青葉

夫木 信実

まうけて葉され色つく。恙相  
さもあしはとあるあまふらん

連いんをも叶ぬ村ぬ恙相宗因

柏若葉 赤柏。若葉乃  
色あうたといふ

常盤葉落葉 冬葉の落ぬ木  
夏葉と落ぬ

新茶

新製古茶

新茶 對して云

刀豆花

色淡紅(俳) 然るるふ 羅州

葵

二葉草。葵うら。日古あひ。折まる桂西の日加茂へ

遺を加茂ふて葵以るうそのを 日らうつうふ日蔭草日蔭の

うらうら日蔭又咲て日あを 唐土めて菟葵くつるのて山州加

茂の山中小生と二葉の葵あひ 面青く裏紫色と帯あうら

上よるるどく桂の木枝あつけ て簾及器小はらるる北山中村

より歎るるの葵の種類五月のあひを 新古今 小侍従

いふるいそのくまのあひを 詞が葵を葵君律宗老きその

か。桂女。白たる車。翁さびの

志る月林山。夜。曙。

(俳) 物怪りるる葵の植速 慶安 狂ぬくると葵の上小玉夜や

(詩) 葵五字對句

野酌勸芳酒 満園種葵藿

(詩) 全七字對句

詩礎

園蔬烹露葵 遠屋樹桑榆

山中習靜觀朝槿 奈蜀葵

紫蘭花

花蘭のじ 紫又白あり

(詩) 紫蘭五字對句

抑軒竹氣淨 拂簾蕙風涼

茶挽草 雀麥穂あり。燕麥

能くふるくまらるもか 玉巻葛

茶引草鬼貫

○巻心葛の葉の芽出しの巻ころこ

能くをぬ紫い玉破き安葛はあ来雪

玉巻芭蕉 宗奩云新葉未開

蓮浮葉 水面浮こ生とると云

卷葉とつくり 季は六月とれ

俳 入月よ蓮の老奈のゆりこころ

詩 卷荷之詞 唐韓偓

侵曉衆涼偶獨来不因魚躍

見萍開 曉ノ涼氣ニサソツレ来

一杯 杯ヲヨク風ニ卷キ葉ノ蓮ノフ

根都古草 針のまろふ細き

猪殃殃 △葎花ともかく或は

梅葉 俳 葉にあらうて画を

麥秋 秋とてハ百穀成熟の期

麥秋 於てハ則ち秋 麥秋風

能くをぬ紫い玉破き安葛はあ来雪

能くをぬ紫い玉破き安葛はあ来雪

能くをぬ紫い玉破き安葛はあ来雪

能くをぬ紫い玉破き安葛はあ来雪

能くをぬ紫い玉破き安葛はあ来雪

能くをぬ紫い玉破き安葛はあ来雪

能くをぬ紫い玉破き安葛はあ来雪

河人ものささぎしんまはくしんを  
ぬぐしむらさきをささるるまうふ 教二

青麥 非 青むらさきをささるるむらさき  
をぬぐしむらさきの圃 鬼光

麥刈 立 春より百二十日して刈  
と旬守但小麦は十日才逢

麥藁笛 麥 の莖とりのりて笛  
守小児の戯きり

○西行奥州小下上村一人の童子小僧  
お僧ハ何国へ行玉人と問ふ西行哥  
枕をん為之をいふづ行ゆふと然るべ  
うはめの方ふおよふ多必辱を得玉  
と冬生夏枯る艸を哥むむは僧もと  
とあふやとふ西行此艸の事頌み并  
かく夫より引けて洛へ帰るるとこ  
この所も西行のりどり 松とあ  
あふの樹今ふあふの草は麦  
之是塩竈の明神示現とふ

詩 麥秋五字對句

川光淨麥隴 綠樹連村暗  
日色明桑枝 黃花入麥明

詩 麥秋之詞 明申時行  
光々秀色挺来牟片々黃雲  
似水流 麥ノ色トリワケ秀クテウ  
ノ水ノ流ノ如クカハナニクハ雲  
波ニ似タリ 風作跳波時隱見

雨添新漲乍沉浮 凡雨ノ波ヲナ  
タリ隱タリ 暗畦錦漾千層澱寒  
隴濤生四月 秋 麥秋ノ豊饒

怪狂瀾頻起陸漫教文偉賦  
中愁起 起ハガゴトシ

蓮花の 若根の順の和名抄  
奇きどの詠ぐるよはらぐみ灰灰み  
とそ侍るて賤き身と塵灰多

以人の思つる心より蓮泥は生じぬが  
泥で戀よとて入てよ免り奥伎抄  
和名抄等も泥とつる字と  
こいちちと訓もろくあり

筍

竹萌の初篁

巨衡

親のこえむくけ人のわよとると  
竹の子れとあるいれつと

俳 笋の皆祀師されや東坡の画季吟

竹れよの春の候なる育けふ久住

老傍の省とかむ後う那 其角

狂 笋とて新髪とてとるはて所

魁附よはをいあまや竹の子候と保友

詩 筍之詞 唐李商隱

嫩穉香苞初出林於陵論

價重如金 出カテニハ

皇都陸海應無數 忍剪凌

雲一寸心 都ニモ幹山ニナカレハレ

剪ヲシキモノナリ

採筍法 朝早く見て露の上ら

どるりのをぬきとるべし露上る

りの大竹とある 竹根ひろくと

止る法 隣よりある人來り妨

とあるか海帶と多く埋め

と此方へ生とくることと

淡竹筍 四月 味ひ淡

盛出 紫竹筍 竹小同

美人艸 けのふはて花は路花葉

唐項王の婦人虞氏自死に其墓上の

生じると艸有る人して美人艸と云ふ古支葉集

○右の外説多し委しくハ廿六丁出

俳 せうの風のまやあ人竹 可申

篠筍 篠の小竹ありて俗に

類多し筍と皆篠子といふ

哥 拾遺 道昭

今い我々うき老の坂へて

又いけつるものト

櫻實

生い青く熟して赤黒  
妙菜 よく魚の毒とじくと

〔非〕実桜や花よりいほはなる温故  
実桜や花とて通るくわう 是水

花よりいほはなる温故  
たひや柄の実 俊之 綿時 透き衣  
三月 櫻木の 咲く

種植

豆 黒豆 大豆 小豆 胡蘆 葫 移栽

石菖蒲 秋牡丹 枇杷 秋海棠  
桂 楓 杠 菊 以月く入替又ハ針植  
するそよとす 毎々

挿木

沉丁花 連翹 雁木  
芙蓉 木犀 柏 椿 等

収採

蜂蜜 稀荳 紅花 蚕豆  
桃仁 桑の実 麥

生類

此部より四月一ヶ月の  
生るひびあり心

郭公

異子規 杜鵑 杜宇 蜀魂  
望帝 不如歸 百舌鳥

玉迎鳥 田歌鳥 早苗鳥 妻戀鳥  
田長 志での田長 無常鳥 夕影

鳥 妹背鳥 勸農鳥 くらきり 時鳥  
貞應首首 遠郭公 為家

常盤井百首 朝郭公 仲正  
やのめれまゝうらえけらうこ

ほろろかふくそなまこりてらるん  
夫木 社頭郭公 大宮大政大臣

このもろとあらけやうとやうに  
もがれそひてあくやうかます

夫木 人家時鳥 法印印宗  
又月まつ志のよの志のやうかます

卯ねむらうめ声るごみと  
弘長百首 雲間子規 行家

志くものうへうここのやうき及  
そくよりいれうこかろらん

夫木 近圃郭公 俊成  
あひなもりのうらみの里ふをそ

かろひあははせきひ外  
同 野郭公 定家

文殊社の木の下を夜ふはしむる  
あきとやまのこゝろをいひて

同 里子規 入道二品のこゝろ

さうよく作もきのみの里はもと  
あまのこゝろをいひて

家集 山寺郭公 西行

時をさういふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふも

詞 和音和音。さうよくいふもいふも  
お声もいふもいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

声。あつめいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

いと声。妻のいふもいふもいふも  
いと声。妻のいふもいふもいふも

むくきとあぶき声。人よるのままとば  
くれごととあひあひ人も啼。古き歌。

月やぐきまの月か多んあう雨あをてふ

されぬのなゆきをまよひむくさちのすり出で  
かくみ月あよそちうりまくあゆのくもよ

よめくまど 早苗 一後みやてくさすのせの

さすくむのちよては田不熟となくよつて  
までの田かさくひよとまきくみ苗うりおがし

田かさくむむいあたり 鶯 さのこの

を多くりまきのうこの中よ あつたを

よつて多よよをあり あつたを

なごちあり 鶯 あつたを

よよりあるとらひ一後あり あつたを

懐者同 ひりーまぐり乃の

連 あつたを

ふふよりか あつたを

俳 あつたを

ふけ あつたを

ふふ あつたを

ふふ あつたを

ふふ あつたを

ふふ あつたを

一僕 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを

待郭公 あつたを



郭公イノコ声コエ

是覺つらむと心こころし  
○白川殿 軌忠

おもむく一夢のおどろくし  
夢のつらふ遠ざかりし

連つら一声の足忽山深やまのふかくおどろ

俳あはれ一夢や只是式しきの由き位伊當

狂あはれやうまいぞあまのまいおとやとあす

夢ゆめごとく今いまの一ひと多おほ宗甫

夜郭公よりの

月つきよとせしとあり  
○続千載 高遠

ささけふもいづとやわくほ郭公

連つら泣なみだるの卵たまごは花はな月つき夜よ保たもくま

月つきのやとあむる夜半よるののやとさす

俳あはれ燒味やきあじをたけしは夜半よるの移竹

詩うた 夜郭公詞 顧况

野人やじん自愛みづか山中宿やまの況はげ是これ葛洪丹

青西あおにし オクヤニヲレハコソハツ子ヲキイ  
タニレテカツコウニヨクノエ

庭前ていぜん有あり箇長松樹かみながまつ夜半よるの子規こき

来上啼きたりなみだ コノタカイニツガニハニアルユ  
ヘニ夜ナカゴロノホトノキス

雨あめ中郭公あめの中 多く五月雨ごごのあめと

○家集 雨中時鳥 顯季

又また月つきあふしまのさうはつとさ

志こころとくわはまじりてさうさ

狂あはれぬの夜よやき舟ふねのそこれ郭公

りして福ふくもふあり一ひとあり東陵

名所郭公なしょの 多くあり詞うたの所ところは出

○夫木 中務卿

あはれいづのあはれはわくあす

志こころのよとくわはまじりてさうさ

俳あはれはのふれおのあはれはわくあす

狂あはれはのふれおのあはれはわくあす

かみの池いけみねをうりて英中

○唐土たうとの郭公かくこうありく多おほ至いたつて

あはれいづのあはれはわくあす

志こころのよとくわはまじりてさうさ

あはれいづのあはれはわくあす

あはれいづのあはれはわくあす

あはれいづのあはれはわくあす

あはれいづのあはれはわくあす

あはれいづのあはれはわくあす

あはれいづのあはれはわくあす

あはれいづのあはれはわくあす

あはれいづのあはれはわくあす

あはれいづのあはれはわくあす

あはれいづのあはれはわくあす

あはれいづのあはれはわくあす

あはれいづのあはれはわくあす

詩 郭公五字對句

トウヨシテナヲカタリ言ヒンカウカクス、メ  
杜宇呼名語 渚蘋行客薦

ハコウニナシテシヲナカシ  
巴江學字流 山木杜鵑愁

詩 同七字對句

詩 礎

クハグハインシキユンシノツキ  
花外子規燕子月 山岫連

スイヘンノセイエイセツコウウヲシホ  
水邊精衛浙江潮 杜鵑啼

タコクヘイタ人カヘリ  
望郷臺下秦人去 顧雲霄

ニナグシヤラサンチウトハシカナシ  
學射山中杜魄哀 子規啼

カウリンテキロナツヨキヨシナシ  
高林滴露夏夜清 南山子規

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

カウリンテキロナツヨキヨシナシ  
高林滴露夏夜清 南山子規

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

トウヨシテナヲカタリ言ヒンカウカクス、メ  
杜宇呼名語 渚蘋行客薦

ハコウニナシテシヲナカシ  
巴江學字流 山木杜鵑愁

詩 同七字對句

詩 礎

クハグハインシキユンシノツキ  
花外子規燕子月 山岫連

スイヘンノセイエイセツコウウヲシホ  
水邊精衛浙江潮 杜鵑啼

タコクヘイタ人カヘリ  
望郷臺下秦人去 顧雲霄

ニナグシヤラサンチウトハシカナシ  
學射山中杜魄哀 子規啼

カウリンテキロナツヨキヨシナシ  
高林滴露夏夜清 南山子規

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

カウリンテキロナツヨキヨシナシ  
高林滴露夏夜清 南山子規

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨

オトツツリンカノサツアノイテラナク  
隣家孀婦抱子泣 我獨



あはれづらふ宿のあはれづらふ  
 詞さかぬ。露の井つた。湯のあまのい。さかたはる。  
 湯のあまのい。さかたはる。さかたはる。さかたはる。  
 衣いり。さかたはる。さかたはる。さかたはる。  
 さかたはる。さかたはる。さかたはる。さかたはる。  
 わさ引糸。さかたはる。さかたはる。さかたはる。  
 筋彩彩をい。糸。さかたはる。さかたはる。  
 風をい。さかたはる。さかたはる。さかたはる。

俳 露の子れ。さかたはる。さかたはる。さかたはる。  
 蛛の巢のあまのい。さかたはる。さかたはる。  
 狂風ほく。吹。さかたはる。さかたはる。さかたはる。  
 けふ世界のけふ。さかたはる。さかたはる。さかたはる。

詩 蜘蛛之詞 唐 元稹

蜘蛛天下足 巴蜀就中多

世カイニ多キクモノ中ニモ 縫隙容長

多キハレヨクノクニナリ 踏虚空織横羅

紫纏傷竹 栢啮啞及虫蛾

木タケラメクリ。今。為送佳人喜

珠櫛無奈何 スリ。ケツカウナル

蚕眉 蚕繭。蚕蛾。眉。眉。眉。

枝蛙 木の枝に居て鳴く故。名づく。雨蛙ともいふ。

鹿伏衣角 鹿茸。春落て四月に生る角。鹿の袋角と斗も季と持る。

蟬子 異名。擁。虎。蟬。蟬。蟬。

初鯉 鯉一名の松魚。肥満魚。堅魚。至て早。春。春。

鯉釣 鯉。用ひず。牛の角。或は鯨牙。物。

京都。甚賞玩。價。貴。

生節

鯉魚と四ツふたより蒸し燻乾して脯となすとす

其の堅硬をゆるくするものと世俗よんであまざりとつくり

必用

此部は四月要用の事又ハ天氣養生の法等を記

日刻

己の日己の刻事とるに

出行作事

西の方小向ひては

破軍

夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
未の方	申の方	酉の方
朝六ツ	朝五ツ	辰四ツ
戌の方	亥の方	子の方
昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
丑の方	寅の方	卯の方
暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
辰の方	己の方	午の方

樂事

清和の天と云霞も霧もほけて空の氣

色翠よりけり○更衣かたよりふん地より○木々の葉若やうなるの後

山吹も咲のころころ○牡丹芍薬盛り富貴へ○郭公の初声○葵祭

天氣

曇りて北風強く暗く西南の風ハ雨も梅雨の前

西風続吹と云々云々云々昼夜之此風よて北国廻船来る○今月粟有

米麦多○庚辰辛己ハ雨降ハ蝗

多かれハ殊ニ養生 立夏の後四

麦と撒す 五日北斗辰己ハ

建此日乾より来る疾風暴雨ハ

當是ハ人と傷と急ハ虚邪賊風

とらハ聖人これと矢石の如ク避

四日用意之品 花よ志

海蘿子干 今月より

七月七日まで干はしつくり  
季の夏とともふあり

**徴不出法**

天気よむ時  
日はうらして

とりたえまん箱よし紙よ  
てとれたまふ張よかきと梅  
雨のちこれとひくけのむび  
づる率うらひあり妙き  
衣服きくもかくれむく  
とれむび生むることば

**草木と伐法**

この月諸  
木とさしむ

蛙とむしとまー○菖蒲  
の葉ありきとて撰てとよの

ころきつうさふぶらー五月よ  
うらて能葉うらふむり

**糊ふ虫はづる法**

糞乃  
葉と

おろひぬあーておけの日数  
と経ても虫少ーも生むと

### 四月飲食并料理献立

<b>料理</b>	<b>汁</b>	<b>鱈</b>	<b>清</b>
汁もさすど	すき	塩鳥	清
汁もさすど	すき	塩鳥	清
汁もさすど	すき	塩鳥	清

<b>汁</b>	さぎたの	<b>鱈</b>	あぢ
さぎたの	たいの	あぢ	あぢ
さぎたの	たいの	あぢ	あぢ
さぎたの	たいの	あぢ	あぢ

あぢ	さぎ	さぎ	さぎ
あぢ	さぎ	さぎ	さぎ
あぢ	さぎ	さぎ	さぎ
あぢ	さぎ	さぎ	さぎ

<b>味</b>	さぎ	<b>煮物</b>	さぎ
さぎ	さぎ	煮物	さぎ
さぎ	さぎ	煮物	さぎ
さぎ	さぎ	煮物	さぎ

焼あゆ	竹の子	煮物	さぎ
焼あゆ	竹の子	煮物	さぎ
焼あゆ	竹の子	煮物	さぎ
焼あゆ	竹の子	煮物	さぎ

切身	さや豆	<b>吸物</b>	さぎ
切身	さや豆	吸物	さぎ
切身	さや豆	吸物	さぎ
切身	さや豆	吸物	さぎ

かいし	青	<b>和會</b>	さぎ
かいし	青	和會	さぎ
かいし	青	和會	さぎ
かいし	青	和會	さぎ

<b>物</b>	青	<b>和會</b>	さぎ
物	青	和會	さぎ
物	青	和會	さぎ
物	青	和會	さぎ

精汁

丸じょう  
大じょう

ますび  
いしけ

竹の子  
栗つぎ

松茸  
ゆを

清汁

ねいし  
おんご

油あげ  
みこ豆

膾

あしが大根  
あざふ

あそ  
うら

あさうら  
あせうら

あげそうふ  
まろしう

まろしう  
まろしう

差味

焼菓子  
引き

まろしう  
まろしう

うら  
うら

青豆

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

まろしう  
まろしう

うら  
うら

のり  
うら

煮物

四月 飲食 四

精汁 丸じょう 大じょう ますび いしけ 竹の子 栗つぎ

膾 あしが大根 あざふ あそ うら あせうら 焼菓子 引き

まろしう まろしう まろしう まろしう 差味 焼菓子 引き

まろしう まろしう まろしう まろしう 青豆 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

まろしう まろしう まろしう まろしう のり うら 煮物

さうさぬよ井の中へはけりさげ  
 水際を放し皮目よる水氣  
 の入らぬやうめて置べし五月  
 上旬比笥の終りされを六月  
 中はくま 同法 皮を去り  
 少し損ぞ 同法 皮を去り  
 切捨二ツは割て節の間よ塩  
 を一をいへし桶よるくべ上よ  
 いく重もかこ蓋せよ 又法  
 おりよかちをくべし 又法  
 皮を去り熱湯よそゆびを  
 けりて納めをくべしそ用る時  
 白水よあつて用

茄久し貯法 李びと桶  
かき たくら な び と 桶

河の瀬早さ処よ埋め石とお  
 ぎいひりさくをいひるまぞ  
 も生よそよく持つ

人家万宝大益重寶之書 全九冊

此本初メ二冊ハ人々万宝ノ第一長生富貴ヲ  
 タモツ心得ヲ記ス心ノ持ヤウニテ父子凡  
 第家内安樂ニクラサル、身ノ行ヒカ其  
 外徳益アル、二十三ケ條ヲトキシメシ左  
 記ス智術全書七冊ヲ副シ弘メ申候

錦囊智術全書 全七冊

智恵ヲ以テ重キ一ノ輕ク出来ナラヌ  
 一ノ心安ク調フ奇妙ノ秘傳秘密ヲ各  
 頭ス書ナリ其集ル処、雨風ノ見ヤウ日  
 取ヨシアシ水練法地震雷前方ニ知り、  
 元山ニ木ヲ生シ井戸ヲ清水トナシ占妙  
 術妙業打身金瘡治方男女ヲ美人ニ  
 スルカズクノ法衣服器物ニツキサマノ  
 妙術料理ノ妙法或蚊虱ノ類スベテ多  
 ノクキ草木ノ花ヲ自由ニ咲セ菓ヲ多  
 クチラセ或久シク貯ヘヤウ其外此書ヨ  
 用ヒテ事ヲナサバ徳益廣大萬宝  
 ヲ得ルノ一奇書ナリ



